



Data

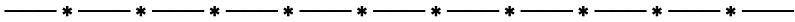
監督・原案：ギレルモ・デル・トロ
 脚本：ギレルモ・デル・トロ/ヴァネッサ・テイラー
 出演：サリー・ホーキンス/マイケル・シャノン/リチャード・ジェンキンス/ダグ・ジョーンズ/マイケル・スタールバーク/オクタヴィア・スペンサー/デビッド・ヒューレット/ニック・サーシー/ナイジェル・ベネット/ローレン・リー・スミス

👁️👁️ みどころ

低予算ですばらしい作品を生み出し続ける「FOXサーチライト・ピクチャーズ」の今年の実力発揮ぶりはすごい。アカデミー賞で『スリー・ビルボード』が主演女優賞、助演男優賞なら、本作は作品賞、監督賞の他、美術賞、作曲賞の最多4部門を受賞。その評価はベネチア国際映画祭でも金獅子賞、ゴールデングローブ賞でも監督賞、作曲賞だ。

メキシコ生まれのギレルモ・デル・トロ監督は『パンズ・ラビリンス』(06年)でも不思議な世界を紡ぎ出していたが、同作で私は「団塊世代の私には、もっと現実の世界を描いてほしかったという思いも・・・。」と評論した。それと同じように、当初は「つらい時代のためのおとぎ話」から出発し、アマゾンの半魚人と声を失った孤独な中年女とのラブストーリーを目指した本作も、何とも不思議なファンタジー。

そんな映画はもともと私の好きな範疇ではないが、本作だけは例外。ラストに見る、水中で抱き合う2人のシーンの美しさにはうっとり！物語も1962年という時代のアメリカがよく表現されているし、東西冷戦時代のスパイ映画の要素も面白い。更に、「古き良きアメリカ」における男の生き方の両極端を見ることができ、大満足！こりゃ必見！



■□■見事に作品賞と監督賞をゲット！美術賞も作曲賞も！■□■

2018年の第90回アカデミー賞では、2月10日に観た『スリー・ビルボード』(17年)と本作が目玉の的だったが、これは両者とも「FOXサーチライト・ピクチャーズ」

の作品。その特徴は『スリー・ビルボード』の評論で紹介したとおりで、ここでは「製作費は1500万ドル以下の低予算が基本」とされている。ちなみに、『スリー・ビルボード』は1200万ドル、本作は1950万ドルだから、『タイタニック』（97年）の2億ドル、『猿の惑星 聖戦記』（17年）の1.5億ドルとの差は歴然だ。

ところが、アカデミー賞が発表される3月5日直前の2月21日付朝日新聞では、「アカデミー賞作品賞の栄冠はどちらの手に？3月5日発表の前にぜひ劇場でご鑑賞ください。」と題して『スリー・ビルボード』と『シェイプ・オブ・ウォーター』が全面広告に。さらに、2月27日付朝日新聞では、「第90回アカデミー賞最多13部門ノミネート」と題して、本作が頁全面で広告されていた。これを見て私は、やはり「FOXサーチライト・ピクチャーズ」でも作品賞、監督賞には本作の方が近いとみているのでは？と推測していると、案の定……。本作は作品賞、監督賞の他、美術賞、作曲賞を含む最多4部門をゲットした。そして『スリー・ビルボード』は主演女優賞（フランシス・マクドーマンド）、助演男優賞（サム・ロックウェル）を受賞したから、「FOXサーチライト・ピクチャーズ」の底力は立証されたし、朝日新聞での異例の大広告も功を奏したのかもしれない。

ちなみに、監督賞を受賞したギレルモ・デル・トロの名前を私はあまり意識していなかったが、彼は『バンズ・ラビリンス』（06年）の監督だと知って、なるほど、なるほど。同作は、ナチス・ドイツと手を組んだフランコ将軍による、レジスタンス派への弾圧という厳しい現実の中で少女オフィリアに魔法の国からのお誘いがかかってくる物語だったが、私は「撮影賞、美術賞、メイクアップ賞を受賞した美しい映像は、たしかに見モノだが、団塊世代の私には、もっと現実の世界を描いてほしかったという思いも……。」と解説し、星3つとしていた（『シネマルーム16』392頁参照）。

そんな、当初は「つらい時代のためのおとぎ話」というタイトルで構想を練り始めたという、ギレルモ・デル・トロ監督の大人のおとぎ話、ファンタジーは一体どんな映画？また、第74回ベネチア国際映画祭での金獅子賞、第75回ゴールデングローブ賞での監督賞、作曲賞の他、なぜアカデミー賞でも作品賞、監督賞等、最多4部門を受賞できたの？

■一方の主演は大アマゾンの半魚人！■

日本人は子供の頃から「桃太郎」や「さるかに合戦」等の童話・民話に親しんでいるが、西洋諸国では「シンデレラ」の物語やアンデルセンの「人魚姫」等の童話・おとぎ話が有名。しかし、ギレルモ・デル・トロ監督は、6歳の頃テレビで「大アマゾンの半魚人」を見たらしい。これは、ユニバーサル・ホラーの傑作『大アマゾンの半魚人』（54年）だが、もちろん私は全く知らない映画。しかし、予告編ではチラリとしか見えなかった、そのアマゾンの半魚人の全体像を本作のスクリーン上で最初に見た時は、その醜悪さとモンスター性に思わずゾー。これが大人のファンタジーの一方の主人公……？

韓国で大ヒットしたポン・ジュノ監督の『グエムル 漢江の怪物』（06年）では怪物の

クリーチャーづくりが大きな話題になった（『シネマルーム11』220頁参照）が、本作に見る半魚人はアマゾンで捕えた水陸両棲の動物。本作ではそのクリーチャーをどのように創造するの？そして、それをどんな俳優がどのように魅力的に演じるの？

アマゾンで捕えた半魚人の調教係がストリックランド（マイケル・シャノン）で、そのボスはホイット元帥（ニック・サーシー）。他方、ホフステラー博士（マイケル・スターバーグ）らは、しのぎを削っているソ連との宇宙開発競争に勝つため、この生き物を人間の代わりに宇宙に送り込む方法をさぐっているらしい。そこでのストリックランドの提案は「生体解剖してでも、その機能を調べるべきだ」ということだが、総責任者であるホイット元帥はそれをいかに判断？この半魚人はアマゾンの奥地では、現地の人々に神として崇められていたから、そんな解剖実験の対象にされるのは迷惑な話だが、とらわれの身としては仕方ない。そんな半魚人の役を演じる俳優ダグ・ジョーンズも大変だが、本作に見るそのクリーチャーは？そしてまた、そんな半魚人がいかにして、大人のファンタジー、美しい愛の神話の一方の主人公に・・・？

■□■他方の主役は、声を失くした孤独な中年女！■□■

他方、アカデミー賞主演女優賞こそ『スリー・ビルボード』のフランシス・マクドーマンドに譲ったものの、本作で「手話」を中心としながら、ヌードシーン等のサービスも見せてくれる女優サリー・ホーキンスの演技もすごい。冒頭、1階に映画館がある大きなアパートの一室に住むイライザ（サリー・ホーキンス）が、朝のルーティーンをこなしてバスに乗り、清掃員をつとめている研究センターに入って仕事をし、またアパートに戻るといふ1日の生活が描かれる。そこには、男の私にはアツと驚くシーンも登場する。なるほど、男に見向きもされないやせない中年女なら、これくらいの（性）生活も当然・・・？

ちなみに、柳下毅一郎氏（映画評論家）の新聞紙評では「1929年、第1回アカデミー賞で監督賞と主演女優賞、脚色賞を受賞したサイレント映画「第七天国」は、孤独な男女の至上の結びつきを描いた天上のラブストーリーであった。無学な清掃員チコは、恋人とともにあることの喜びを手ぶりで「チコ・・・ディアンヌ・・・天国！」と表現する。」と紹介した上、「その感動的な手話が、まさかそれから90年後に再現されようと、いったい誰が思ったのだろうか？それもよりによってモンスター・ムービーとして。」と解説しているが、まさにそのとおりだ。

『第七天国』と同じように、イライザの仕事は清掃員。相棒の黒人女ゼルダ（オクタヴィア・スペンサー）はおしゃべりで行動的だから、機密のセンターで働くにはイマイチ不適切だが、イライザは口が利けないから実に好都合。本来そんな役割分担のはずだったが、新たな機密研究のためセンターに運び込まれた半魚人の姿を見たイライザは興味津々。普通は恐さが先に立つものだが、孤独で口の利けないイライザには、孤独で虐待されている半魚人がかえってお友達に思えたらしい。そのため、最初は自分の好物のゆで卵を与える

ところから始まり、その後は音楽を聞かせたり、手話を教えたり……。このように2人の感情が少しずつ交流し合う中、醜悪に見えた半魚人（モンスター）と口の利けない孤独な中年女とのロマンスが……？

それが本作の主軸のテーマだが、本作では1962年の東西冷戦時代下における、宇宙開発競争の時代だったため、なぜかロシア語のセリフも入り込み、スパイ映画と見間違えるようなシーンやストーリーが登場するので、それにも注目！

■□■「美女と野獣」のインチキ性とは？この指摘の賛否は？■□■

私の中学高校時代、日活は「青春モノ」が、松竹、大映は美男美女の「メロドラマもの」が名物だった。それは基本的に世界各国いつの時代も共通で、それらの「恋愛モノ」はやっぱ美男美女が主役だった。しかし、それには例外もある。『人魚姫』や『美女と野獣』、更に『キングコング』等がそうだ。すなわち、『美女と野獣』はタイトルどおり、なぜか美女が野獣と仲良くなっていくストーリー。そのテーマは「人は外見じゃない」ということだが、ラストで野獣は見事に美男の王子様に変身したうでハッピーエンドになる。

ところが、そんな一般的な解釈に異を唱えたのがギレルモ・デル・トロ監督。パンフレットにある『「モンスターは救世主で、僕はその伝道師だ」 ギレルモ・デル・トロ、自作を語る』では、「アンチ美女と野獣」と題して、彼は「僕は『美女と野獣』が好きじゃないんだ。「人は外見じゃない」というテーマなのに、なんでヒロインは美しい処女なんだ？」と疑問を呈したうえ、「だから『シェイプ・オブ・ウォーター』のヒロインをモデルみたいな美女にしたくなかったし、映画の冒頭でヒロインに自慰をさせた。恋人のいない中年女性の日常としては自然なことだろう？」と解説している。なるほど、なるほど。私はこの意見に大賛成だが、さてあなたは……？

■□■「つらい時代」の男たちの生き方は？■□■

今から思い返せば、日本では1960（昭和35）年から1970（昭和45）年頃の高度経済成長時代が、『ALWAYS』3部作で描かれた、誰もが前向きで夢を持つことができた「昭和の良き時代」。それに対して、「古き良きアメリカの時代」は、ジェームズ・ディーンの『理由なき反抗』（55年）やプレスリー音楽に代表される、1950年代から1965年頃の時代。そこでは黒人差別はあったものの、郊外の庭付き一戸建てに住み、妻はブロード美女で、車はキャデラックが理想で、現在トランプ大統領がしきりにアピールしているのは、基本的にそこへの哀愁と回帰だ。

本作のパンフレットには町山智浩氏（映画評論家）の「神とモンスターの新時代に乾杯！」があり、そんな時代状況に触れているが、「つらい時代のおとぎ話」というタイトルで構想が練られ始めた本作における「つらい時代」とは一体ナニ？それが、このREVIEWを読めばよくわかる。ケネディ大統領による1961年のベトナムへの派兵と196

2年10月の「キューバ危機」の発生は大きな政治問題だったが、その他にも黒人差別を巡る公民権運動やソ連との宇宙開発競争は大きな政治問題だった。また『ドリーム』（16年）ではNASA（アメリカ航空宇宙局）における黒人女性数学者の大活躍が明るく描かれていたが、本作に見る半魚人の宇宙派遣計画とそのため生体解剖実験の可否はあくまで重要機密事項だから、そのため研究センターが暗く陰鬱だったのは仕方がない。

そんな時代状況の中、町山氏の前記REVIEWでは「小便の後、手を洗うのは弱虫だ」と語るストリックランドは、「アメリカの男性主義の塊」だと書かれている。つまり妻をレイプするように犯し、男の弾痕にすら指を突っ込み、妻の口をふさいで黙らせ、イライザが口を利かないのを「好きだぜ」と言うストリックランドは、今では両者とも「絶滅人種」となってしまった高倉健タイプではなく、三船敏郎タイプのいかにも「日本男児」のイメージらしい。それに対して、本作では脇役ながらイライザの隣のアパートに住んでいる画家のジャイルズ（リチャード・ジェンキンス）の存在感がキラリと光っている。売れない画家ジャイルズはイライザのただ一人の友人だから、イライザから半魚人を紹介された時（？）には、驚きつつ彼に少しずつ慣れていったのはさすが。ところが、彼がピザを食べるために通っているダイナーでは、一見仲良くなりそうになったウエイターと「ある出来事」によってたちまち離反してしまう。このジャイルズは、あの「つらい時代」における人間の善意を代表する人物のようだ。しかし、いくらそんなジャイルズでも、密かに半魚人をセンターから脱走させ、海の中に逃がしてやるというイライザの計画の手伝いは無茶。「無理に決まってる」「違法だ」とジャイルズが突っぱねたのは当然だが、イライザから再三の懇願を受けると、彼の最終決断は・・・？

ホフステラー博士についてはスパイ映画もどきの展開にビックリだが、ストリックランドとジェイルズについては、あの「つらい時代」における男の生きかたの両極端な例として、しっかり目に焼き付けておきたい。

■美しい水中シーンと抱き合う2人に注目！■

半魚人は両棲動物だが、通常は水の中で生活している。したがって研究センターから脱出させた彼をイライザが匿うのは、狭いバスタブの中だ。そこに塩を入れたり、なんやかやと彼の生存のための努力は大変だが、このようにイライザとの間に互いの心が通ってくると、次にそれはひょっとして男女の「性愛」に発展？誰しもそう思うが、さてその展開は？

隣人のジャイルズにはそんな展開は「まさか・・・？」と思えたようだが、ゼルダは女同士だけにイライザとの会話はあけっぴろげ。そのため、「ちゃんと、ついてたよ。」というイライザの発言にゼルダは納得・・・もともと、一旦は半魚人の訴えるような目を見て、それを拒否したものの、思い直してバスタブに近づき、自ら服を脱いでいくイライザと半魚人とのラブシーン（ベッドシーン？）は未だかつて見たことのない風景だから、

それはあなた自身の目でしっかりと。さらに、半魚人へのサービスが高じて (?)、バスタブ内の水だけでは不足だとばかりに水道を出しっぱなしにして、浴室はおろかイライザの部屋全体、ひいては1階に映画館のある大きなアパート全体を水浸しにしてしまう行動は如何なもの・・・? そう思うのは当然だが、本作の冒頭に、あるナレーションと共にスクリーン上に映し出される水の中の風景は実に美しいので、それに注目!

『タイタニック』(97年)では、映画中盤にジャックが超大型のダイヤモンドの宝石だけを身に着けたローズの裸身像をスケッチするシーンが、突然海の中の遺物ばかりのシーンに切り変わったのが印象的だったが、何もかも飲み込んだ水の中は美しいものだ。本作ラストには、そんな冒頭のシーンと呼応するかのように、ストリックランドの拳銃で撃たれたイライザを抱きかかえたまま海の中に飛び込んだ半魚人が、イライザと抱き合う美しいシーンになる。それがチラシの写真であり、前述した朝日新聞全面広告の写真だが、スクリーン上で見るその美しさは息を呑むばかりだ。

本作では半魚人のクリーチャーづくりが大きなポイントになるのは当然。私は導入部ではその醜悪さに思わず目をそむけたが、イライザと仲良くなる中盤以降は次第に彼の姿に慣れてくると共に、ラストに向かってはその神々しさにも納得。そして、ラストではまさにギレルモ・デル・トロ監督が目指した「切なくも愛おしい、誰も観たことがない究極のファンタジーロマンス」に納得し、アカデミー賞作品賞、監督賞にも納得!

2018 (平成30)年3月15日記